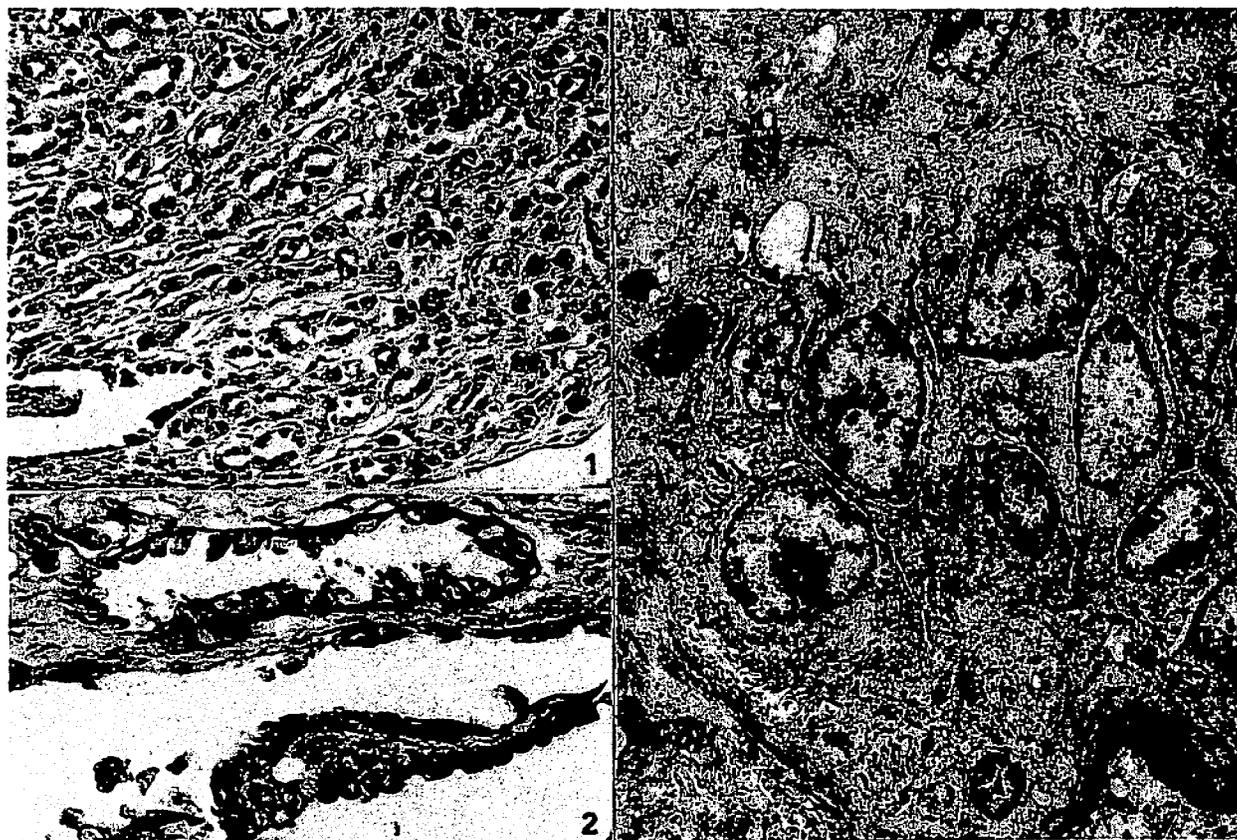


高齢牛にみられた胸膜中皮腫

農林水産省家畜衛生試験場病原病理出題

第20回獣医病理学研修会標本No.330



動物：ウシ（黒毛和種），16才，雌。

昭和41年から採血用牛として購入，使用された。昭和50年肥満のため子宮脱を起したが，加療と減食により治癒。昭和54年廃用となり殺処分。とくに臨床的に異常を認めなかった。

剖検所見：左胸腔肋骨胸膜，縦隔膜および肺胸膜に粟粒大～鶏卵大灰白腫瘤が播種状に散在ないしは密在し，時にこれらが合して腎臓面大のカーリーフラワー状ないしは息肉腫様の腫瘤となっていた。腫瘤は硬く，断面は密実感を有し髓様であった。その他，肝の富脈斑と腎皮質における白斑形成が存在した。

組織学的所見：腫瘤は主として単層立方上皮様細胞の乳頭状配列ないしは腺腔配列によって形成されていた(写真1.×160, H.E)。部位によっては，このような配列構造が不明確で多核ないしは単核の上皮様細胞が基質の線維に囲まれていた(写真，1右側)。腫瘍組織の基質は線維性で，アルシアンブルー染色とPAS反応は弱陽性を示した。鍍銀染色では，立方上皮様細胞を囲むように細線維

が染まり(写真2.×400)，その周囲に粗い膠原線維がよく発達していた。電顕的には上皮様細胞はjunctional complexで連なって(写真3 ↓印)明確な腺管構造あるいは不完全な腺管構造を形成したが，基底膜は不連続で，これを欠くものも多かった。上皮様細胞は一側性に細胞質突起がよく発達し(写真3)ていたが，必ずしも腺管構造の内腔面に一致するものではなかった。ゴルジ装置は狭く，小胞体は粗面で紐状であり，時にループ状に分布していた。細胞質基質は特徴的で，10nmのmicrofilamentが密に発達していた(写真3)。上皮様細胞の外側すなわち腫瘍組織の基質は膠原線維と10nmのmicrofilament様の細線維で構成され，この腫瘍のFibrous varietyを示す所見と思われた。

牛の中皮腫は子牛で報告され，胎児性腫瘍と考えられているが，本例のように老齢における発生例の報告はなく，その病理組織発生を考える上で興味ある症例と思われた。

診断：老齢牛にみられた胸膜中皮腫